

2012年10月29日

第3000号

週刊(毎週月曜日発行)
購読料1部100円(税込)1年5000円(送料、税込)
発行=株式会社医学書院
〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23
TEL (03) 3817-5694 FAX (03) 3815-7850
E-mail: shinbun@igaku-shoin.co.jp
JCOPY (社) 出版者著作権管理機構 委託出版物

New Medical World Weekly

週刊医学界新聞



医学書院 www.igaku-shoin.co.jp

今週号の主な内容

- [インタビュー] 日野原重明氏に聞く 1面
- [グラフ] 日本の医療と『週刊医学界新聞』の60年…… 2-3面
- [寄稿] 私と医学界新聞(高久史磨、矢崎義雄、井村裕夫、伊藤正男、金澤一郎、南裕子、黒川清、川島みどり、李啓充、河合忠、井部俊子)…… 4-7面
- ご愛読感謝プレゼントのお知らせ…… 8面

『週刊医学界新聞』3000号スペシャル・インタビュー

聖路加国際病院理事長

日野原重明氏に聞く

敗戦により接収された病院図書室でウイリアム・オスラーを知る。オスラーに導かれるかのように、1951年、39歳にして米国留学を果たす。帰国後は臨床医学教育の改革や予防医学の普及に着手。58歳でよど号ハイジャック事件に遭遇した後、「神様から与えられた」第二の人生を医の道に捧げる。その歩みは、101歳を迎えた今もなお続いている。

——日野原先生の弊紙初登場は1955年4月15日付の第156号。それから座談会・対談・インタビューだけ数えても44回、寄稿や連載を含めると200回以上ご参画いただきました。

日野原 1955年という、私が43歳のときですね。

——そのときは日野原先生の著書『水と電解質の臨床』の紹介記事でした。

日野原 私は1941年に聖路加国際病院の内科医として赴任し、戦後すぐに『看護学雑誌』で『高等看護学講座』(後の『系統看護学講座』へと発展)の執筆を始めました。

米国エモリー大学に1年間留学したのが1951年。帰国後はドイツ式に偏っていた当時の日本の医学に米国式の医療を取り入れたいと思い、著述活動に力を入れました。そこで最初に出版したのが、『水と電解質の臨床』です。当時は日本語で書かれた電解質のテキストはなかったので、内科医も外科医もこぞ買って買いました。

——顔写真付きの記事は1959年が最初で、『今日の治療指針』の編集に当たった日野原重明氏」と題した人物紹介の記事が載っています。

日野原 あれも、米国の“Current Therapy”に相当する本が日本にあると有益だろうということで、私が医学書院に話を持ちかけたんです。毎年改訂して、開業医も勤務医も買うから、医学



● 武見太郎氏(写真左)との対談「科学・哲学・医学」より
(『週刊医学界新聞』1982年1月4日発行1479号)

書院の大きな収入源になりました(笑)。——武見太郎先生との対談(写真)を振り返っていただけますか。

日野原 私もまだ若いねえ。日本医師会長の武見太郎先生に対して、私は聖路加国際病院の内科医でした。おまけに聖路加の院長だった橋本寛敏先生は日本病院協会(現・日本病院会)の会長を務めた方で、病院協会と医師会は対立関係にありました。でもどういわけか、私は武見太郎先生にはとても可愛がってもらった記憶があります。——お二人とも大の読書家として知られていますが、対談はリベラル・アーツの深淵を感じさせます。

日野原 武見先生の家に行くと、読んだ本を書棚に返さないで、床にうず高く積まれているの。びっくりしてね。それに、物理学者の仁科芳雄先生に師事したり、西田幾多郎先生のような哲学者とも交友があった。科学や哲学を医学と結び付けるといのは武見先生の考えなのですが、私も共感できるから話が弾んで、いま振り返っても楽しい対談でした。

——英国プライマリ・ケアの第一人者であるJ.フライ、POSの提唱者であるL.L.ウィードなど、海外の識者とも多くの座談会の場を持たれました。

日野原 私がライフ・プランニング・センターの理事長として彼らを招聘し、その際に座談会も開催して医学界新聞に掲載することで、プライマリ・ケアやホスピス、EBMなどの世界の新しい潮流を、日本に広めることができました。医学界新聞を読めば、戦後の日本の医療がわかるぐらいです。

——日野原先生は革新の必要性をしばしば強調されますが、その精神を支える原動力は何なのでしょう。

日野原 米国留学を終えて帰国後、将来の専攻科にかかわらず、よくある病気に対応できる研修の必要性、そして内科専門医制度の創設を私は訴え続け

てきました。もちろん、システムを変えようとする、反対する人もたくさん出てくる。内科専門医制度をつくる時も猛反対があって、謀反者のような言われ方をしてね。

私の人生の大半は既存のシステムとの戦いですよ。そして実現までの道のりも長かった。でもめざすべき未来がみえたなら、誰かが行動に移さなければ何も変わらないわけです。

——赤軍派による「よど号ハイジャック事件」(1970年)の後、「世のため人のために生きよう」という気持ちがあります。強まったそうですね。

日野原 あのとときは58歳。3晩4日拘束された末に解放されてね。韓国の金浦空港から自宅に戻った翌日、家内と一緒に「ゆるされた第二の人生が多少なりとも自分以外のことのために捧げられれば」と挨拶状を書きました。

橋本先生が「1週間ほど休養しなさい」と配慮してくださったので、その後は熱海のホテルに投宿したんです。睡眠剤を飲んでひと晩中寝て、朝起きたら太陽が昇って芝生がきれいね。あの瞬間に生まれ変わったような気持ちになって、「残された人生は神様から与えられたものだ」と感じました。

結局2日間だけ休んで病院に戻ったのですが、しばらくして宗教哲学者のM.ブーバーの本を読んだら、こういう言葉が書いてありました。

「はじめることさえ忘れなければ、人はいつまでも若い」。

*

日野原 2000年に始めた「新老人の会」のスローガンのひとつも「創(はじ)めること」。100歳になって、私はFacebookも始めましたよ。

哲学者のプラトンは、「人間には4つの徳が必要である」と説きました。即ち、英知、正義、自制心、そして勇氣です。ただ、勇氣だけではなく、「勇氣ある行動」も大切だと私は思います。

情報入手の手段が多様になった現代において、新たなジャンルをどのように確立していくべきか。出版社も検討を加えていかなければなりません。医療系出版社としてめざすべき未来を定めて、そして勇氣を持って行動に移してほしい。これが医学書院と、3000号を迎えた医学界新聞に対する、私の要請です。(了)



私の人生の大半は既存のシステムとの戦い。めざすべき未来がみえたなら、行動に移さなければ何も変わらない。

日本の医療 と 週刊医学界新聞 の 60年

1955年の創刊から、医学・医療の最新トピックを伝え続けてきた『週刊医学界新聞』。このたび3000号を迎えるにあたり、

過去の紙面を紐解き、その歴史を俯瞰した。わが国の医療のあゆみとともに振り返る、『週刊医学界新聞』的60年史。

医 ……『週刊医学界新聞』関連トピック 医 ……医学書院関連トピック

1955年

医 『科学図書新聞』を買収、『旬刊医学界新聞』に改題①



社に残る、最も古い『科学図書新聞』は99号(1953年3月25日発行)。151号より『旬刊医学界新聞』(毎月5・15・25日発行)と改題。153号で『医学界新聞』と改題された。

1957年

医 『旬刊』から『週刊』化②



医学界新聞
New Medical World

New Medical World Weekly
週刊 医学界新聞

『医学界新聞』が『旬刊』から『週刊』化(218号)。続けて『医学界新聞』に改題(219号)され、249号で現在の『週刊医学界新聞』となった。タイトルロゴも変化を重ねている。

1957年

医 抗生物質カナマイシンの発見③



国産初の抗生物質として、梅澤濱夫氏(国立予防衛生研)らが発見。このころは、集団健診、全国的な実態調査など、結核の話題が紙面の多くを占める(写真は240号)。

1959年

医 『今日の治療指針』創刊④



石山俊次氏(関東通信病院)、日野原重明氏(聖路加国際病院)、渡辺良孝氏(東京厚生年金病院)編集、250人の執筆者により創刊。「私はこう治療している」をキャッチフレーズに、全科全領域を網羅する治療年鑑として現在まで不動の地位を築く(写真は350号)。

1961年

医 看護領域の特集号が初めて組まれる⑤



453号前後から「看護特集号」を隔月1回ペースで企画。写真は1963年発行の特集「看護制度15周年を迎えて」(566号)。看護領域の三制度を統合し、国家資格化すべく発表された「保健婦助産婦看護婦令」(48年)からの15年を振り返った。

1962年

医 第1回医学書院看護学セミナー開催⑥



1962年度日本看護協会総会に際し、第1回医学書院看護学セミナーを東京・尚国会堂で開催。同セミナーは現在までに145回を数える(写真は485号)。

1962年

医 「まむしのたわごと」連載開始⑦



医学書院創業者・金原一郎の名物エッセーで、1981年(1468号)まで連載。医学書院HPにて、全文の閲覧が可能。「まむし」は金原一郎の自戒で「一度食いついたら離れない執念」に由来する。

1965年

医 交通救急センター開設⑧

経済・産業の発展とともに自動車普及した反面、交通事故などによる重症外傷患者が増加。こうした患者の受け入れのため、神奈川県に全国初の施設が誕生した。

1965年

医 国立小児病院開院⑨



わが国初の小児疾患専門の病院として、小児医療の中核的役割を担った。2002年に国立大蔵病院と統合し、国立成育医療センター(現・国立成育医療研究センター)となる(写真は666号)。

1972年

医 1000号発行⑫



特集ではテレメディシン(遠隔診療)を取り上げた。へき地医療対策に、当時最先端のエレクトロニクスを活用した新しい診療方法への期待が伺える。

1973年

医 第1回内科専門医試験実施⑬

日本内科学会が認定する内科専門医制度の第1回試験が行われ、17人中5人が合格。本制度は、1994年から「認定医制度」と形を変え、他の内科系領域の専門医取得の基礎資格となっている。

1975年

医 東京女子医大に日本初のCT導入⑭



当時は撮影に数分かかり、頭部専用装置として導入された。1288号の対談「CT時代を迎えて」(東大・佐野圭司氏×同・田坂皓氏)では、救急医療や脳腫瘍治療への貢献のほか、金銭的負担や技師の育成など課題も語られた。

医 B4判からタブロイド判へ('84)
医 初のカラー紙面('84)⑯

「生命と倫理に関する懇談会」発足('83)⑱

医 1500号発行 特集:現代フランスの外科('82)

日本人の死亡原因第1位が
脳血管疾患からがんへ('81)
AIDS症例が世界で初めて報告される('81)⑰

国民医療費総額
10兆円突破

第1次オイルショック
変動為替相場制移行

沖縄返還

高齡化率7%超え
高齡化社会へ

環境庁発足('71)⑪

第1回内科専門医試験実施('73)⑬

東京女子医大に日本初のCT導入('75)⑭

准看護婦養成廃止総決起大会('76)⑮

「救急医療懇談会」発足('76)⑯

琉球大学医学部設置、
全都道府県に医大が
配置される('79)

1980

インターン制度廃止('68)⑩

医 『系統看護学講座』
創刊('68)

国立がんセンター開設('62)
国民皆保険が実現('61)

高度経済成長期

1960

東京オリンピック

抗生物質カナマイシンの
発見('57)③

医 『今日の治療指針』創刊('59)④

医 「まむしのたわごと」連載開始('62)⑦

医 第1回医学書院看護学セミナー開催('62)⑥

医 看護領域の特集号が初めて組まれる('61)⑤

医 『胃と腸』創刊('66)

国立小児病院開院('65)⑨

交通救急センター開設('65)⑧

医 『medicina』創刊('64)

6年制大学医学部開設('55)

医 『科学図書新聞』を買収、『旬刊医学界新聞』に改題('55)①

医 「旬刊」から「週刊」化、『週刊医学界新聞』と改題('57)②

1968年

医 インターン制度廃止⑩

1967-68年にかけ、学生運動の激化に伴い、インターンおよび無給医局員をめぐる問題が過熱。東大医学部インターン生が医師国家試験をボイコットする事態も発生した。68年の医師法改正でインターン制度は廃止。学部卒業時の国家試験受験が可能となり、「医師免許取得後2年以上の臨床研修」を努力規定とする臨床研修制度が創設された。

1971年

医 環境庁発足⑪

1967年の公害対策基本法制定を受けたもの。高度経済成長による都市化・工業化のひずみが水俣病、イタイタイ病などの公害病となって表れ、公害対策が急務とされた。

1976年

医 准看護婦養成廃止
総決起大会⑮



戦後の看護婦不足解消のため、1951年に導入された准看護婦制度の存廃をめぐる議論が高まる。同大会では、准看護婦制度の廃止および高卒者対象の3年以上の看護教育を求め、将来的には大学での看護教育を目標に定めた(写真は1195号)。

1976年

医 「救急医療懇談会」発足⑱

救急患者の受け入れ困難例が増加するなか、厚生省による「救急医療懇談会」が発足。患者受け入れ体制や情報ネットワークの整備に向け検討を開始した。また同年、日医大病院等4病院が救命救急センターに指定された。

1981年

AIDS 症例が世界で初めて報告される⑱



この年、米国疾病管理予防センターから AIDS の最初の症例が報告された。以来米国で積み重ねられてきた AIDS の臨床的所見について、本紙では記事「急増する米国の AIDS」で紹介。これ以降も、1980年代には AIDS を扱う記事が多く見られる(写真は1548号)。

1983年

「生命と倫理に関する懇談会」発足⑲

体外受精や臓器移植が可能になるなど医療技術が大きく進歩する一方、脳死や生殖医学など、生命倫理の諸問題への関心が高まってきたのがこのころ。こうした背景を受け、厚生省により同懇談会が発足した。

1984年

初のカラー紙面⑩



1581号にて初めてカラー印刷を採用。特集は「見る技術としての医学」。1600—1800年代の顕微鏡から当時最新の電子顕微鏡までが紹介された。

1987年

利根川進氏にノーベル生理学・医学賞⑳



1987年、遺伝子工学的手法による抗体生成に関する免疫グロブリンの構造を解明した功績により、利根川進氏がノーベル生理学・医学賞を受賞。日本人初の同賞受賞者となった。

1992年

医 2000号発行㉑



特集では、聖路加国際病院が新築されたのを期に当時の院長・日野原重明氏にインタビュー。また、「医人たちの20年」と題し、これまでの紙面を飾った人々をコラージュ風に紹介した。

1995年

阪神・淡路大震災㉒



本紙では、震災後の医療活動について紹介。その10年後、災害時に医療者が果たすべき役割をあらためて検証した(写真は2615号)。

1996年

医 医学書院 HP 開設㉓



1996年に医学書院 HP 開設。郵政省の「平成8年度通信利用動向調査」によれば、当時は「パソコン通信利用世帯」が4.6%(対象:4159世帯)という時代だった。写真は HP 開設当初のトップページ。

1996年

専門看護師の誕生㉔

日本看護協会設立50周年のこの年、「精神看護」分野で2人、「がん看護」分野で4人の専門看護師が誕生した。2012年現在、専門看護分野は合計11分野にまで発展している。

2000年

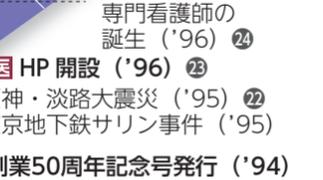
医 [MedicalFinder] 本格稼働⑳⑲



電子ジャーナルサイト「MedicalFinder」開始。医学書院より発行されている医学・看護領域の30誌以上を電子化、創刊号から読めるものも。

2004年

新医師臨床研修制度開始㉕



インターン制度の廃止から36年、マッチングシステムを伴う新たな医師臨床研修制度が開始された。同号では、日本の「臨床研修」の過去・現在・未来を探った(写真は2566号)。

2007年

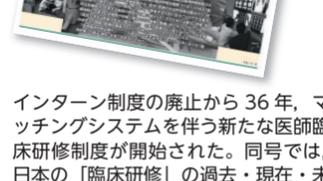
がん対策基本法施行㉖



2007年4月「がん対策基本法」施行に向け、新年号にて基本法の理念や拠点病院の現状を紹介。今後のがん医療を展望した(写真は2713号)。

2008年

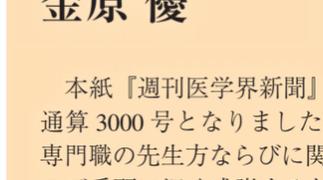
医 [MedicalFinder] 本格稼働㉗



電子ジャーナルサイト「MedicalFinder」開始。医学書院より発行されている医学・看護領域の30誌以上を電子化、創刊号から読めるものも。

2009年

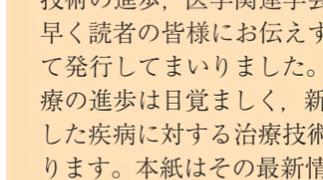
EPA 看護師候補者が初めて国家試験を受験㉘



この年、経済連携協定(EPA)に基づいて来日した外国人看護師候補者が初めて国家試験を受験。2012年までに、インドネシアとフィリピンから受け入れた候補者のうち計66人が合格。

2012年

山中伸弥氏にノーベル生理学・医学賞㉙



2012年、成熟した細胞を、多能性を持つ状態に初期化できることを発見した功績により、山中伸弥氏(京大 iPS 細胞研究所長)がノーベル生理学・医学賞を受賞した。



東日本大震災('11)
「シリーズ ケアをひらく」から2冊が受賞('10)㉚
モバイルアプリリリース('10)
3000号発行('12)
山中伸弥氏にノーベル生理学・医学賞('12)㉙
新型インフルエンザが世界的に流行('09)㉘
EPA 看護師候補者が初めて国家試験を受験('09)㉘
医学生・研修医版がレジデント号として独立('06)
新医師臨床研修制度開始('04)㉕
健康保険法改正により、70歳未満の医療費窓口負担が3割に('03)
医 2500号発行 特集:日野原重明氏×川島みどり氏対談('02)
中央省庁再編で厚生労働省誕生('01)
介護保険法施行('00)
専門看護師の誕生('96)㉔
HP開設('96)㉓
阪神・淡路大震災('95)㉒
東京地下鉄サリン事件('95)
医学書院創業50周年記念号発行('94)
看護情報版が看護号として独立('93)
医 2000号発行('92)㉑
看護情報版開始('91)
初の電子出版物『今日の診療CD-ROM』発売('91)
利根川進氏にノーベル生理学・医学賞('87)㉐
医 金原一郎記念医学医療振興財団設立('87)
医学生・研修医版開始('86)
国立精神・神経センター開設('86)
医師国試が年1回に('85)

2007年

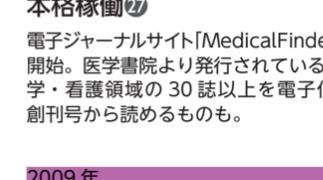
がん対策基本法施行㉖



2007年4月「がん対策基本法」施行に向け、新年号にて基本法の理念や拠点病院の現状を紹介。今後のがん医療を展望した(写真は2713号)。

2008年

医 [MedicalFinder] 本格稼働㉗



電子ジャーナルサイト「MedicalFinder」開始。医学書院より発行されている医学・看護領域の30誌以上を電子化、創刊号から読めるものも。

2009年

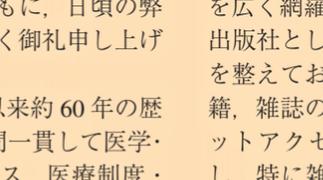
EPA 看護師候補者が初めて国家試験を受験㉘



この年、経済連携協定(EPA)に基づいて来日した外国人看護師候補者が初めて国家試験を受験。2012年までに、インドネシアとフィリピンから受け入れた候補者のうち計66人が合格。

2012年

山中伸弥氏にノーベル生理学・医学賞㉙



2012年、成熟した細胞を、多能性を持つ状態に初期化できることを発見した功績により、山中伸弥氏(京大 iPS 細胞研究所長)がノーベル生理学・医学賞を受賞した。

2009年

新型インフルエンザが世界的に流行㉘



この年、新型インフルエンザ(A/H1N1)が世界的に流行。国内では学術集会の延期・中止も。同年6月11日、WHOは警報フェーズをパンデミック期とする「フェーズ6」まで引き上げる声明を出した(写真は2812号)。

2010年

医「シリーズ ケアをひらく」から2冊が受賞㉚



「シリーズ ケアをひらく」より、「逝かない身体—ALS 的日常を生きる」(川口有美子著)が第41回在宅一人ノック賞を、「リハビリの夜」(熊谷晋一郎著)が第9回新潮ドキュメント賞を受賞した。

『週刊医学界新聞』第3000号発行に寄せて

(株)医学書院代表取締役社長

金原 優



本紙『週刊医学界新聞』は、本号をもって通算3000号となりました。本紙読者である専門職の先生方ならびに関係各位に対し長年のご愛顧に深く感謝するとともに、日頃の弊社出版物へのお引き立てに厚く御礼申し上げます。

『週刊医学界新聞』は創刊以来約60年の歴史を重ねておりますが、その間一貫して医学・医療関連領域の最新のニュース、医療制度・医学教育制度の改革ならびに医学研究と医療技術の進歩、医学関連学会の動きなどをいち早く読者の皆様にお伝えすることを目的として発行してまいりました。この間、医学と医療の進歩は目覚ましく、新知見や新たに発見した疾病に対する治療技術も日々変化しております。本紙はその最新情報を読者の皆様にお伝えしてまいりましたが、それらは医学・医療関連領域の発展、進歩に少なからず役立

ってきたのではないかと自負しております。

弊社は1944年8月の創業以来、「医学書院は専門書出版社としての役割と責任を自覚し、医学・医療の進歩に必要な専門情報を的確に伝え、医学・医療の発展と社会の福祉に貢献することを使命とする」ことを社として出版活動を展開しております。その範囲は基礎医学、臨床医学、看護学、リハビリテーション、介護などの医学・医療関連領域全体を広く網羅し、同領域における総合医学情報出版社として先生方の要請にお応えする体制を整えております。また、情報提供媒体も書籍、雑誌のみならず、電子媒体、インターネットアクセスによる電子出版にも広く対応し、特に雑誌は発行全31誌を電子ジャーナルとして提供しております。

本紙『週刊医学界新聞』も弊社の情報提供媒体の一つとして発行を続けてまいりましたが、今後も継続して医学・医療関連領域の先生方にとって不可欠な情報を提供してまいります。読者各位におかれましては引き続き本紙をご愛読いただくとともに、弊社出版物に対するご支援とお引き立てをお願い申し上げます。

私と医学界新聞

『週刊医学界新聞』では、過去に多くの医療者の方々にご登場いただきました。そこで3000号を機に、これまでの記事を通じ深いかかわりのある方々に「私と医学界新聞」と題して弊紙との思い出を振り返っていただきました。



正しく医学の新しい流れを取り上げ続ける医学界新聞

高久 史磨
(日本医学会会長)

この原稿の依頼に関連して医学書院から送られてきた資料によると、私が医学界新聞の座談会に最初に出たのは、「新しい医学教育をめぐって——臨床系の系統講義のあり方」(第1315号、1978年9月11日発行)。ちょうどそのころ私は自治医大の教務委員長をしており、基礎・臨床統合講義やクリニカル・クラークシップの在り方について試行錯誤していた時代であった。

東大の内科の教授をしていた時代には、京大内科の井村裕夫教授(当時)との対談が、「21世紀への内科学——分子内科学の進展と内科学の統合」(第1927号、1991年1月7日発行)をテーマに行われた(下写真)。ちょうど分子生物学的な手法が内科学の研究に積極的に取り入れられるようになり、内科学の研究が新しい時代を迎えようとした時期であった。また、1993年には「遺伝子治療の現状と将来」(第2025号)をテーマとした新春座談会に司会として登場した。私が厚生省(当時)で遺伝子治療臨床研究の審査委員会の委員長をしている時期である。

私は毎週送られてくる医学界新聞のタイトルには一応目を通すようにしている。それを見ると、私が今までに参加したときと同じように新しい医学の

展開や医学教育に関係するテーマが多く、現在もその状況が続いているという印象を持っている。今年の新春特集「日本発!! ブレイン・マシン・インターフェース新時代」(第2959号、2012年1月2日発行)などは正しく医学の新しい流れ、しかも臨床的な有用性の高い医療技術を紹介する記事として高く評価したい。

医学界新聞には今後とも新しい技術の紹介や医学教育などの問題を取り上げていただきたいと考えているが、私が特に問題にしているのは現在の医師国家試験である。私は自治医大の学長をしているときから3日間に500題という医師国家試験の現状は医学生にとって過剰な負担であり、そのため臨床実習の時間が短くなっているいつも考えていた。

わが国では臨床実習に入る前に共用試験が行われており、共用試験の内容は確実に良くなってきている。共用試験と医師国家試験とをどのように連動させるか、全国医学部長病院長会議でも問題になっていると聞いているが、この問題を医学界新聞でも取り上げてもらいたいと考えているのは私だけではないと思う。



時世の変遷と共感の歩み

矢崎 義雄
(国際医療福祉大学総長)

わが国の医学・医療は、1961年の国民皆保険制度の確立により、安心社会を実現するとともに、戦後の復興から世界第2位の経済大国に発展した過程で、基盤となる社会システムとして大きな貢献をしてきた。しかし、この20年間で、経済の成長時代が終わり、人口の少子高齢化も加わり、社会保障の持続可能性が危惧されるようになり、医療を取り巻く環境は大変厳しい状況になっている。

このように大きく変遷してきた医学・医療の時々々の動向を的確にとらえて、適切な論評を加えて報道してきたメディアはごく少数であり、その中でも、60年近い伝統を有し、しかも編集部が充実していた『週刊医学界新聞』の果たした役割は極めて大きかったと思っている。

そこで、私はこのように大きく変わる医学・医療にあって、医学界新聞に共感を持って歩んできた思いが強い。特に、新医師臨床研修制度の発足時と、病院の医師不足に伴って注目されたチーム医療について、時宜を得た特集を組んでいたことが、印象深い。

2004年に新医師臨床研修制度が発足した。医師が総合的な診療能力を修得することをめざした研修制度で、総合的なスーパーローテーション方式と、研修病院を研修プログラムから選択できるマッチングシステムの導入、さらに研修に専念できるような処遇を行った画期的な制度である。当初は十分な理解が得られなかったが、医学界新聞では発足時よりたびたび特集を組んで、新制度確立に大きく貢献していただいた。

一方、医療の高度化と人口の高齢化により、医師が、専ら業務を行う従来の体制では対応が困難となり、看護職を中心とした医療職種が、知識と経験、そして技術を持ち寄って医療を行うチーム医療の推進が欠かせないことが明らかになった。それには新たなカリキュラムに基づいた教育内容の見直しと責任体制の構築も必要となった。医学界新聞には、このような課題についても、理解を深めるための特集を組み、チーム医療の重要性が広く認識されるようになったことに深く感謝している。



社会の大きな転換期と医学・医療

井村 裕夫
(京大名誉教授/先端医療振興財団理事長)

『週刊医学界新聞』は、医師のみでなく多くのメディカル・スタッフに最新の情報を提供する専門紙として大きな役割を果たしてきた。私も対談や座談会に出たり、書評を書いたりしたことがあったが、最近読者の一人としてさまざまな新しい情報を学ぶ場として活用している。研究・診療の現場を離れた私にとって、このような情報源は大変貴重である。

さて、現場を離れると今まで見えなかったことが見え、あまり気にしなかったことが気になるようになる。そのことの一つについて書いてみたい。それは急速に進む少子高齢化の医学・医療への影響である。戦後わが国では、出生率は早くから低下していたが、ベビーブームの世代の影響で総出生数の減少はあまり顕著ではなかった。豊富な生産人口が、日本の経済や社会保障、特に医療を支え今日の長寿社会を実現する一つの要因となった。人口のボーナスを活用してきたわけである。

しかし、総出生数の減少が次第に顕著になり、またベビーブーマーも引退し始めたことでボーナスはなくなり、

医療をはじめとする社会保障をどう持続可能なものにするかが深刻な課題となりつつある。内閣官房の試算によると、2025年の総医療費は53兆円を、介護費は19兆円を超える見込みであるという。

もちろんこの問題は医療のみでなく、雇用、労働形態、生活様式、社会構造など、極めて幅の広い問題である。社会が全体として大きな転換期にさしかかっていると見える。しかし医療費が社会保障費の大きな部分を占めているだけに、医療の在り方について真剣に考えねばならない時が来ていることは疑いがない。限られた資源を活用してどのように人々の健康を守るのか、そのために力を入れるべき分野は何か、医療をどのように効率化するか、どのような老後が理想か、どのように死を迎えるか。これらはすべて医療関係者と国民の間に対話が必要な問題である。

2015年に京都で開催する「第29回日本医学会総会」では、こうした問題についても討議したいと考えている。



●対談「21世紀への内科学——分子内科学の進展と内科学の統合」での井村氏(左)と高久氏(右)
内科学が経験の学問から科学へと変貌した20世紀を振り返り、21世紀を展望した。医学書院本社ロビー(当時)にて。

50人の先輩医師にきいてみよう

あなたへの医師キャリアガイダンス

研修病院選びの決め手は何か、専門を何にするか、臨床か研究か、留学や開業をいつするか……。医師としてのキャリアの積みかたは多様だ。本書では50人の先輩医師が「今のあなたの悩みについて、かつて(あるいは現在進行形で)同じように悩み、このような道を選んだ」と、本音で語る。執筆陣は聖路加国際病院内科の現役・OB/OGという共通点はあるがその経歴は多種多様。さまざまな努力や転機となったエピソードが興味深い。

編集 岡田 定
聖路加国際病院内科チエスマン
堀之内秀仁
国立がん研究センター中央病院呼吸器内科
藤井健夫
聖路加国際病院腫瘍内科



最新がん研究を俯瞰する、新しいスタンダードテキスト

新刊 デヴィータがんの分子生物学

Cancer: Principles & Practice of Oncology-Primer of the Molecular Biology of Cancer

▶腫瘍学のバイブル「Cancer」をもとに、同じ編者によりがんの分子メカニズムに特化して新たに書き起こされた、入門書よりも一段上の教科書。最新情報を踏まえ、これまでのがん研究を総括。前半で基礎原理を解説し、後半で臓器・疾患別がんの分子生物学的知識を提供。文章は簡潔にして明瞭、鍵となる図はわかりやすく、重要な情報は要領よく整理されている。がん研究に携わる医学・生物学・薬学・獣医学・理学系大学院生や研究者、及びがん治療に携わる臨床家に最適。

監訳: 宮園浩平・石川冬木・間野博行

定価9,030円(本体8,600円+税5%)
B5変 頁544 図・写真152 2012年
ISBN978-4-89592-722-2

MEDSI メディカル・サイエンス・インターナショナル
113-0033 東京都文京区本郷1-28-36
TEL.(03)5804-6051 http://www.medsi.co.jp
FAX.(03)5804-6055 Eメール info@medsi.co.jp



脳科学の時代を振り返って

伊藤 正男

(理化学研究所脳科学総合研究センター特別顧問)

私の専門である脳科学はこの40年ほどの間に目覚ましく進歩したが、その時を追っての進歩については医学界新聞にたびたび取り上げていただいた。第1040号(1980年6月30日発行)には酒田英夫氏と私の対談「脳の設計図を求めて」、第2128号(1995年2月8日発行)には金澤一郎、永津俊治、立石潤、吉田光男各氏と私を含めての座談会「『脳の世紀』構想——脳研究の現状と展望：臨床編」が掲載されている。これらを読み比べて見ると、この時期、脳の研究が多角化し、一つの大きな研究分野にまとまりだした様子がよくわかる。そして1996年には日本で初めての大型戦略研究プロジェクト「脳科学の時代」が発足し、その後すでに16年を経た。

この間の進歩を概観してみると目立つのは研究技術の進歩である。特にいろいろな分子プローブを使ったニューロンの分子的な活動の可視化技術、オプトジェネティクスと呼ばれニューロンを光で刺激したり光で活動を記録する方法、遺伝子を操作して神経回路を一時的に遮断する方法など、あるいは、脳波のように脳から取り出した信号を使ってロボットの腕を動かすなど、以前は夢のようにしか思われなかった研究方法が実現ないし、それに近い状況にある。

しかし、欲を言えば目覚めている人間の脳の中から個々のニューロンの信号を取り出すというそれこそ夢のよう

な技術が欲しくなる。無茶を言うようだが、今盛んに使われているファンクショナルMRIもついこの前までは夢のような話であったことを思うと、ただ笑ってばかりはいられない。

基礎的な脳研究の分野では、個々のシナプスの伝達や可塑性にかかわる分子、細胞レベルの研究が大きく進んだが、多数のニューロンが作るニューロン回路あるいはシステムの働きを理解することはまだ難しい。このような局面では、コンピューターシミュレーションが次第に有効性を増してきた。例えば、B.サクマンは網膜から大脳皮質に至る視覚系の構造に基づいた忠実なモデルをスーパーコンピューター上に作り、その活動を目に見えるようにしている。

現時点ではあらかじめ想像できるような出来事しか再現されていないが、その先に何が出てくるか期待もされる。また大脳皮質の回路をコンピューターに写しとって、その回路がどのような自発活動を起こすかを調べるマカムのBlue Brain Projectが進行している。大脳皮質には脳波状の波がよく出るが、浅層では得体の知れない波が出ることもあるそうだ。そういうものの意味を調べるにはどうしたらよいかの問題となるだろう。わが国でも「京」のようなスーパーコンピューターを使って大いに研究してほしいところである。



分子遺伝学の世界へのデビュー

金澤 一郎

(国際医療福祉大学大学院長/東京大学名誉教授)

あれは、私の頭髪がまだ黒々としていた1983年のことだった。私が、それまでのハンチントン病の脳の神経伝達物質の研究から、遺伝子の研究に転向するきっかけとなる記事が、11月の『Nature』誌に載った。その数か月前にシカゴでの研究会で会ったばかりのジェームス・グゼラ博士らが、多型を検出するDNAプローブを用いての連鎖解析によって、ハンチントン病の遺伝子座が第4染色体短腕の先端部にあることを突きとめたという記事だった。

しかし、その内容は、われわれ臨床家にはなじみの薄い遺伝子連鎖に関する遺伝学的知識と、当時やっとなら端緒についたばかりのDNA解析技術の両方を熟知していないと理解できないシロモノだった。当時、私がいた筑波大学で、この二つの領域の専門家に指導を仰ぐことができたのは幸運であった。さらに幸運なことに、この論文の重要性を喝破された先輩が、このグゼラたちの論文を医学界新聞で解説したらどうか、と私を推薦していただいた。

執筆依頼を受けてから、私はあらためてこの論文がこの時以降の遺伝病解明に与える大きな影響を実感して、読者にわかりやすい解説をしようと心を込めた。慣れない図を作ったりした。そのおかげで、私自身この論文を非常によく理解できるようになった。だから、この医学界新聞に執筆した記事は、私の分子遺伝学の世界へのデビューを飾った、記念すべき記事なのである。

私の顔写真付きの記事は1984年3月に載ったが、タイトルは「ハンチントン病のgene markerの発見——神経疾患と遺伝子工学の接点」(第1592号、1984年3月26日発行)だった。それ以後も、数回ほど座談会や対談に呼んでいただいて多くの先輩や後輩の方々とお話をさせていただいた。1987年には「神経科学の近未来」(第1753号、1987年6月22日発行、下写真)、1995年には「『脳の世紀』構想——脳研究の現状と展望：臨床編」(第2128号、1995年2月6日発行)、1996年には「展開期を迎えたヒトゲノム解析」(第2172号、1996年1月1日発行)と題する各座談会、そして2010年には「今、求められる診断とは」(第2883号、2010年6月14日発行)と題して永井良三先生(現自治医科大学長)との対談をさせていただいた。

こうして幾たびか座談会や対談に呼んでいただいたのは光栄なことなのだが、そこに載っている自分の写真を見て、年を追うごとに私の顔が膨らんでいることに驚いている。これ以上膨らまないようにするためには、医学界新聞に二度と顔を出さないようにするのが一番良いようである(笑)。



●座談会「神経科学の近未来」のもよう。左から彦坂興秀氏、金澤氏、高坂新一氏



●連続座談会「脳とこころ——21世紀の課題・1」(第2472号)より
左から野々村禎昭氏、合原一幸氏、伊藤氏、藤田哲也氏、乾敏郎氏、茂木健一郎氏。

●書籍のご注文・お問い合わせ

本紙紹介の書籍に関するお問い合わせは、医学書院販売部まで
☎(03)3817-5657
なお、ご注文は最寄りの医書取扱店(医学書院特約店)へ

日本の医療を創った「対話」と「革新」の軌跡



日野原重明 ダイアローグ

「週刊医学界新聞」に掲載された日野原重明氏の講演・インタビュー・対談・座談会などから11本を厳選し書籍化。医学教育、プライマリ・ケア、POS、緩和医療など、医学界の発展は日野原氏の革新の精神とともにあった。

[対談者] 武見太郎、阿部正和、柴田進、J.Fry、小林登、紀伊國献三、川上武、R. G. Twycross、B. M. Mount、植村研一、L.L.Weed、森忠三、片田範子、児玉安司、阿部俊子、福井次矢、川島みどり

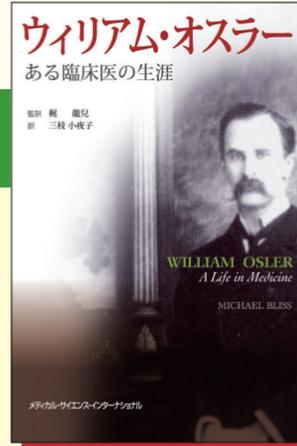
●A5 頁264 2012年 定価2,310円(本体2,200円+税5%)
[ISBN 978-4-260-01706-0]

医学書院

え!? 今の医学生はオスラーを知らないの!?

ウィリアム・オスラー

ある臨床医の生涯 WILLIAM OSLER
A Life in Medicine



監訳: 梶龍兒 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
感覚情報医学講座臨床神経科学分野 教授
訳: 三枝小夜子 翻訳家

ウィリアム・オスラーは、世界の歴史上、最も偉大な医師であったと言えるか?

本書は19~20世紀にかけて米国の医学教育の基礎をつくり、日本にも多大な影響を与えたウィリアム・オスラー博士のこれまでにない伝記である。ややもすると神格化されがちなオスラーを、膨大な資料の検証ときめ細かな調査に基づき、公正かつ客観的に、魅力的な「生身の人間」として描出。当時の社会や文化的背景も踏まえた医学史としても興味深い。医学生や臨床家が、現代医学の根底にある「医の哲学」を学び、考えるのに格好の書。またその生き方は、ひろく一般の読者をも魅了して止まない。

定価 3,780円 (本体3,600円+税5%) A5変 620頁 図3・写真38 2012年 ISBN978-4-89592-707-9



今に通じる時代の節目

南 裕子
(高知県立大学学長)

3000号に達した医学界新聞と私の
かわりには約30年前にさかのぼる。

聖路加看護大の教授として就任したばかりのころ、当時の学長の日野原重明先生のお導きによるものである。それから何回かかわらせていただいたが、今に通じる二つの記事を挙げて紹介したい。

プライマリ・ナーシングの制度を確立し、マグネットホスピタルとしても有名になった米国のベス・イスラエル病院のJ. C. Clifford 副院長(当時)を聖路加看護大でお招きした。その機会にと日野原先生とともに彼女のお話を聞く場が設けられ、鼎談記事が第1571号(1983年10月24日発行)に掲載されている。看護師の副院長は日本では珍しい時代だったので、40歳のころの私は、Clifford氏に直接的な質問を次々に投げかけた。この記事を読み直すとチーム医療

における看護職の責任と可能性について現在の日本の課題に通じるものがある。特にケアとケアは二分化するものではないこと、看護職の自立は他職種との協力のもとに成り立



●鼎談「縛らない看護」より。左から、末安氏、南氏、田中氏。

つという彼女のコメントは今でも新鮮である。

それから約20年後、2000年の新春鼎談に日本看護協会会長という立場で介護保険施設での「縛らない看護」について、当時東海大の末安民生氏と上川病院総婦長の田中とも江氏と鼎談を行った(下写真、第2373号、2000年1月31日発行)。前年3月末に厚生省(当時)から「身体的拘束の禁止規定」という通知が出されたが、そのころの臨床現場と職能団体の先駆的な活動が見える記事である。私はそのとき、権限が限定されている看護者の不自由さ(心身ともに束縛されている感覚)が根底にあって、「人が人を縛る」という「あってはならないこと」を仕方なく、または慣習として受け入れていたのではと語っている。これも残念ながら今に通じるものではないだろうか。



対話作法の道場

川島 みどり
(日本赤十字看護大学名誉教授)

1955年に創刊された医学界新聞の歩みは、51年からスタートした私自身の看護歴とほとんど重なっている。私にとっての医学界新聞は、毎号の記事から時々の医学・看護界のトピ

ックを知る貴重な情報源であっただけではない。書評や随想というコンパクトに意見の表出を図る機会は、文章表現の大変貴重な修練の場でもあった。さらに、手元にある1995年以降のインタビューや対談記事



●第2500号記念対談での川島氏(左)と日野原氏(右)「日本の医学・看護の再構築を語る——戦後50年が育んだ礎石」と題し、日米の違いを踏まえ20世紀の医療を振り返りながら、21世紀の医学・医療の在り方を展望した。

あらためて読み返して、何と幸運な場を与えられたのだろうか、折々の編集者に感謝しながら記憶をさかのぼった次第である。

なかでも、看護学雑誌創刊50年記念と題した座談会「看護の50年を振り返る」(第2217、2220、2225号)は、太平洋戦争争敗戦から50年間にわたり、行政や教育、政治にかかわってこられた金子光先生と高橋シュン先



医療制度の変化に先見の明

黒川 清
(政策研究大学院大学アカデミックフェロー・教授/
日本医療政策機構代表理事)

週刊医学界新聞は、医療界の出版物としては発刊の時からかなりユニークな立ち位置を見せていたと思う。私も何回か登場する機会を得ていた。

従来の「業界」の雑誌等が、主として医師向けであったスタンスから、若手医師のニーズ、特に医学生、研修医などへ向けたもの、看護へ向けたものを、「週刊」「新聞」のようなカタチで発刊してきた。

医学書院は医学・医療界では主流の出版を手掛けていた中心的出版社であるだけに、「週刊」「新聞」のような形式はちょっと気が付かない新しい在り方、さらには医療界の中心に活動する新しい対象へ、分け隔てなく配信しているような形になっていた。

近代社会制度の中での医療制度は長い間、医師を中心に形成されてきた。日本も例外でない。そして医師の世界では大学教授と講座制度に支えられたヒエラルキー的構造にあった医学教育、研究、そして医療制度。医師は医療制度の中心にあった。

そして国民健康保険制度の導入から50年の医療制度。多様な医療従事者の価値観と変わる社会の価値観と疾病構造、そして進歩を続ける医科学、バイオテクノロジー、社会科学、医療をめぐる訴訟など。時代の変化が激しく起こり始める。

ネットで情報が広がり、高齢社会、生活習慣病の増加などの疾病構造が変化し、さらに情報の広がりが社会に浸透していくにつれ、多様なニーズを感じる社会の一方で、す

そ野の現場の医療者の意識も変化していく。

医師に従属していると感じられていた看護師、さらには将来の医療を担う学生、レジデントなどが参加し、同僚を対象に、新鮮でしかも読みやすい、週刊新聞の発刊を始めたのは、まさに時代のニーズにあった先見の明というべきであろう。

当時に比べると、日本ばかりでなく世界の先進国での医学教育も診療の在り方も時々刻々と激変してきた。いわゆるグローバル化時代である。

時代のニーズを先取りした、他国の医療や医学教育の変化の在り方、李さんの「アメリカ医療の光と影」などの超長期の連載は、ちょうど医学部での教育改革、臨床教育や研修、また歴史と医療制度の時代の変化を反映させた素晴らしい読みものになっている。医師として活動していたころの李さんに私がボストンでお会いしたのは20年ほど前だが、執筆活動中心へと立場を変えて以来の長い間の執筆には頭が下がる。



●新春対談「2002年、日本の医療をどう変える」(第2469号)での黒川氏(左)と木村健氏(右)

生という大先達のお話を伺いながら司会をさせていただいた。1996年から翌年にかけて3号にわたって分割掲載されている内容は、まさに、戦後看護のオーラルヒストリーであり、看護歴史学的な面からも貴重な資料と言える。

歴史といえば、第2500号(2002年9月2日発行)での日野原重明先生との記念対談(左写真)でも、さまざまな形で育んだり失ったりしてきたものを総合して、この戦後50年間というのは、その後の医学・看護の再構築に通じる礎石と位置付けている。21世紀の今、医学・看護学に重ねて読むと興味深いものがある。

このほか、小玉香津子先生との「ヴァージニア・ヘンダーソン選集」刊行記念対談や、ペナーの「看護ケアの臨床知」の監訳者井上智子先生との対談では、新刊書の紹介を超えた看護そのものの在りようを示唆する上で議論が

深まった。また、ナイチンゲール没後100年記念の女子医大名誉教授・岩田誠先生との対談(第2868号、2010年2月22日発行)、医療過誤防止に関する李啓充先生との対談(第2410号、2000年10月30日発行)など、いずれも読み捨てるわけにはいかない。

対談の醍醐味は、その場の雰囲気や新たな話題等で予想外の展開を見ることである。相手の論旨に耳を傾けながら自分の意見をまとめて伝える手法を含めて、もし「対話作法」というものがあるとしたら、私にとっての医学界新聞はその手法を鍛える道場であったと思う。

医学書院ホームページ
毎週更新しております
医学書院の最新情報をご覧ください
<http://www.igaku-shoin.co.jp>

約200の薬物を追加し堂々改訂、ヴィジュアルで薬理学を理解しよう!

新刊 カラー図解
これならわかる薬理学 第2版
Pocket Atlas of Pharmacology, 4th Edition

▶薬理学の基礎から薬物動態のメカニズム、疾患との関係まで、その全領域を解説。改訂に際し約200の薬物を追加した。一項目は見開き2頁で完結、左右に図と解説文を配した構成は、効率のよい理解を促す。図は臨床と関連づけて示され、病態生理や疾患について把握しつつ、薬物の薬理作用や臨床応用を体系的に理解することができる。医・薬・看護系学生のサブテキストとして、研修医、臨床医の知識の整理に極めて有用。

訳: 佐藤 俊明

定価6,720円(本体6,400円+税5%)
A5変 頁400 図169 写真5
2012年 ISBN978-4-89592-725-3

MEDI 医療・サイエンス・インターナショナル
TEL.(03)5804-6051 http://www.medi.co.jp
113-0033 東京都文京区本郷1-28-36 FAX.(03)5804-6055 Eメール info@medi.co.jp

『週刊医学界新聞』への広告掲載のご用命は、
下記の代理店までお願いいたします。

株式会社 医薬広告社 TEL 03-3814-1971	福田商店広告部 TEL 06-6231-2773
株式会社 東広社 TEL 03-3409-8803	株式会社 文京メディカル TEL 03-3817-8036
合資会社 日本医学広告社 TEL 03-5226-2791	株式会社 メディカルブレーション TEL 03-3814-5980
株式会社 ハイブリッジエージェンシー TEL 03-3814-0089	医学書院



インフォームド・コンセントから始まった17年

李 啓充
(医師/作家)

私が医学界新聞に連載を始めるようになったきっかけは「インフォームド・コンセント」だったので説明する。学生時代には不真面目だった私が一生懸命文献を読むようになったのは研修医になってからである。ところが、文献を読むたびに出てくる「informed consent」という言葉の意味がわからず、「『知らされた同意』って何のことだ。医学部で教えてくれなかったぞ」とフラストレーションを募らせるようになった。

「意味がわかった」と思えるようになったのは卒業してから4年目。米国人医師が書いた、その名も『Informed Consent』というタイトルの小説を読んだときだった。しかも、小説の落ちは「インフォームド・コンセントのおかげで患者の命が救われる」というもので、「こんなに面白くて啓蒙的な本を日本に紹介しない手はない」と、よせばいいのに、翻訳を企図するようになってしまった。

素人が仕事の合間にする翻訳とあっ

て、完了までには10年の歳月を要した。苦労を重ねての翻訳だっただけに出版したくなくなったのは人情で、人づてにあちこちの出版社に話を持ちかけたものの、どこからも断られてしまった。医学書院にも断られたのだが、ただ断るのは気の毒だと思ったのか、それとも、間に立って紹介して下さった方の顔を潰すのはまずいと思ったのかは知らないが、「米国の医療事情について医学界新聞に4、5回の予定で書きませんか？」と誘って下さった。こうして始まった連載が、一時中断したもののずるずるの続き、ついに17年目に突入した。ここまで続けて来られたのは、ひとえに読者の支援のおかげだったので、あらためて感謝したい。

ところで、私を医学界新聞の連載に引きずり込んだ「インフォームド・コンセント」だが、先日、某大学の病院長が「米国式のインフォームド・コンセントは日本になじまない」とする誤解を講演で語るのを聞いてしまった。まだまだ啓蒙が必要なようである。



50年以上前から続く医学知識普及の原動力

河合 忠
(自治医科大学名誉教授/国際臨床病理センター所長)

1956年春、1年間のインターンを終え医師国家試験を受験し、その結果を待たずに渡米。米国病理専門医資格を取得して1962年12月に帰国した。今年、帰国後ちょうど50年目を迎えた。

振り返ってみると、筆者の最初の日本語での論文を投稿したのが医学書院の『臨床検査』誌で、1963年である。それ以来、医学書院の雑誌に多くの論文が掲載され、医学書院から刊行された筆者の単著は4冊、分担執筆・編集・共著は約90冊に及ぶ。『血漿蛋白、その基礎と臨床』(1969年刊)は719ページにも及ぶ単著で、幸い多くの読者から好評をいただき、2年後には英語版『Clinical Aspects of the Plasma Proteins』とそのスペイン語版が出版された思い出の著書である。共著では、医学生の間で“異常メカ”の愛称で親しまれ続けている『異常値の出るメカニズム』(初版1985年)があり、増刷と改訂を重ね、現在第6版の編集作業が進行中である。

『週刊医学界新聞』にも、いろいろな機会をとらえて登場させてもらった。その中でも、最も重要なテーマの一つは「基準値、基準範囲」で、菅野剛史浜松医大教授(当時)との対談として企画され、第2085号(右写真、1994年3月21日発行)と第

2215号(1996年11月11日発行)に掲載された。従来、あいまいな形で使用されていた「正常値、正常範囲」という言葉を削除し、医師国家試験出題基準(1993年版)に初めて「基準値、基準範囲」が記述され、今日では広く医学界に定着しているが、その概念を医療従事者に広く普及させる一つの大きな原動力になった。

こうした医学書院とのつながりで、『週刊医学界新聞』と「MEDICAL POCKET DIARY」とを今日まで継続して寄贈していただいております。筆者の日常生活の一部となっている。特に、医学界新聞は他の専門分野の雑誌・書籍の出版状況をup-to-dateに知ることができ、また今日の課題について簡潔にまとめられた記事、対談、鼎談などは筆者にとって不可欠な情報源であり、インターネット時代の今日でも貴重な情報源であり続けている。



●対談「正常値」から「基準範囲」へ」より
菅野氏(左)と河合氏(右)。「正常値から外れると病気が認識される」使う時々によって意味が異なる」などの「正常値」という言葉が抱える問題をあぶり出し、現在の「基準範囲」という検査値の考え方や検査の標準化について提唱した。



社会にひらく「看護のアジェンダ」

井部 俊子
(聖路加看護大学学長)

2005年1月より『週刊医学界新聞』看護号に「看護のアジェンダ」の連載を始めてから、2012年10月22日号で(第94回)となりました。学会等でお会いする看護師をはじめ、医師やジャーナリストなどから「読んでいます」「楽しみにしています」という声を掛けられ、医学界新聞の読者層の厚さを実感しています。ある時は社会学者から、ホーソン工場の実験が報告された文献の年号が間違っているという貴重な指摘をいただいたこともあります。2005年以前には、私は看護系雑誌に連載していましたが、看護職以外からの反応はほとんどありませんでした。

毎月、「看護のアジェンダ」に載せる事柄を考えて、原稿用紙5〜6枚に執筆するという作業は、私の生活の一部になっています。20日を過ぎると、私の頭は原稿の執筆モードにセットされます。何を書くかがすっと決まる時もあるけれど、ああ今月は書けないのではないかと焦る時もありますが、今のところ連載に穴をあけたことはありません。

「遠野で聞いた物語」(第2946号)は、東日本大震災の被災地の看護管理者に会いに行き行って書きました。「看護の力」(第2864号)も松山に取材に行きました。これを書こうと決めると、何か自

分をつき動かすものがあるのです。これまでに書いた93編に及ぶ「看護のアジェンダ」。手元にあるテーマのリストを眺めると、映画をヒントにしたものや小説からストーリーを発展させたものが目につきます。執筆に際して心がけていることは、「看護を社会にひらく」ことです。看護が持つて

いる力を世の中に知らせ、看護のアジェンダを共有していきたいと考えています。私の気ままな原稿の最初の読者である編集長の、時に鋭い指摘や励ましを追い風に、自分の感覚を信じて、書く作業に真摯に挑戦していきたいと思っています。

シリーズ ケアをひらく

弱いロボット
岡田美智男
ゴミを見つければ拾えない、雑談はするけれど何を言っているかわからない—そんな不思議な「引き算のロボット」を作り続けるロボット学者がいる。彼の眼には、挨拶をしたり、おしゃべりしたり、歩いたりの「なにげない行為」に潜む「奇跡」が見える。他力本願なロボットを通して、日常生活動作を規定している「賭けと受け」の関係性を明らかにし、ケアをすることの意味を深く肯定してくれる異色作!

●A5 頁224 2012年 定価2,100円
(本体2,000円+税5%) | ISBN978-4-260-01673-5

ソローニュの森
田村尚子
本書の舞台は、思想家フェリックス・ガタリが終生関わったことで知られるラ・ボルド精神病院。写真家・田村尚子氏の震える眼は、この伝説の病院に流れる「緩やかな時間と曖昧な日常」を掬い出します。医療と生活の境界を大胆に横断して注目を集める「シリーズ ケアをひらく」は、今回、田村氏の視線に注目しました。ルポやドキュメンタリーとは一線を画した、ページをめくる喜びに満ちた割目の写真集です。

●B5変型 頁132 2012年 定価2,730円
(本体2,600円+税5%) | ISBN978-4-260-01662-9

驚きの介護民俗学
六車由実
『神、人を喰う』でサントリー学芸賞を受賞した気鋭の民俗学者は、あるとき大学をやめ、老人ホームで働きはじめる。そこで出会った「忘れられた日本人」たちの語り身に委ねられていると、やがて目の前に新しい世界が開けてきた……。『事実を聞く』という行為がなぜ人を力づけるのか。聞き書きの圧倒的な可能性を活かし、高齢者ケアを革新する話題の書。

●A5 頁240 2012年 定価2,100円
(本体2,000円+税5%) | ISBN978-4-260-01549-3

その後の不自由
『嵐』のあとを生きる人たち 上岡陽江+大嶋栄子
●A5 頁272 2010年 定価2,100円
(本体2,000円+税5%) | ISBN978-4-260-01187-7

技法以前
べてるの家のつくりかた 向谷地生良
●A5 頁252 2009年 定価2,100円
(本体2,000円+税5%) | ISBN978-4-260-00953-6

コーダの世界
手話の文化と声の文化 澁谷智子
●A5 頁248 2009年 定価2,100円
(本体2,000円+税5%) | ISBN978-4-260-00953-9

ニーズ中心の福祉社会へ
当事者主権の次世代福祉戦略
編集 上野千鶴子+中西正司
●A5 頁296 2008年 定価2,310円
(本体2,200円+税5%) | ISBN978-4-260-00643-9

発達障害当事者研究
ゆっくりでいいにつなかりたい 綾屋紗月+熊谷晋一郎
●A5 頁228 2008年 定価2,100円
(本体2,000円+税5%) | ISBN978-4-260-00725-2

こんなとき私はどうしてきたか 中井久夫
●A5 頁240 2007年 定価2,100円
(本体2,000円+税5%) | ISBN978-4-260-00457-2

ケアってなんだろう 編著 小澤 勲
●A5 頁304 2006年 定価2,100円
(本体2,000円+税5%) | ISBN978-4-260-00266-0

べてるの家の「当事者研究」 浦河べてるの家
●A5 頁310 2005年 定価2,100円
(本体2,000円+税5%) | ISBN978-4-260-33388-7

ALS 不動の身体と息する機械
立岩真也
●A5 頁456 2004年 定価2,940円
(本体2,800円+税5%) | ISBN978-4-260-33377-1

死と身体
コミュニケーションの磁場 内田 樹
●A5 頁248 2004年 定価2,100円
(本体2,000円+税5%) | ISBN978-4-260-33366-5

見えないものと見えるもの
社交とアシストの障害学 石川 准
●A5 頁272 2004年 定価2,100円
(本体2,000円+税5%) | ISBN978-4-260-33313-9

物語としてのケア
ナラティブ・アプローチの世界へ 野口裕二
●A5 頁220 2002年 定価2,310円
(本体2,200円+税5%) | ISBN978-4-260-33209-5

べてるの家の「非」援助論
そのままがいいと思えるための25章 浦河べてるの家
●A5 頁264 2002年 定価2,100円
(本体2,000円+税5%) | ISBN978-4-260-33210-1

リハビリの夜
熊谷晋一郎
●A5 頁264 2009年 定価2,100円(本体2,000円+税5%)
(ISBN978-4-260-01004-7)

大宅壮一ノンフィクション賞受賞

逝かない身体
ALS的日常を生きる
川口有美子
●A5 頁276 2009年 定価2,100円(本体2,000円+税5%)
(ISBN978-4-260-01003-0)

新潮ドキュメント賞受賞

病んだ家族、散乱した室内
援助者にとっての不安全感と困惑について 春日武彦
●A5 頁228 2001年 定価2,310円
(本体2,200円+税5%) | ISBN978-4-260-33154-8

感情と看護
人とのかわりを職業とすることの意味 武井麻子
●A5 頁284 2001年 定価2,520円
(本体2,400円+税5%) | ISBN978-4-260-33173-3

あなたの知らない「家族」
遺された者の口からこぼれ落ちる13の物語 柳原清子
●A5 頁204 2001年 定価2,100円
(本体2,000円+税5%) | ISBN978-4-260-33117-0

気持ちのいい看護 宮子あすさ
●A5 頁220 2000年 定価2,205円
(本体2,100円+税5%) | ISBN978-4-260-33088-6

ケア学 越境するケアへ 広井良典
●A5 頁276 2000年 定価2,415円
(本体2,300円+税5%) | ISBN978-4-260-33087-9

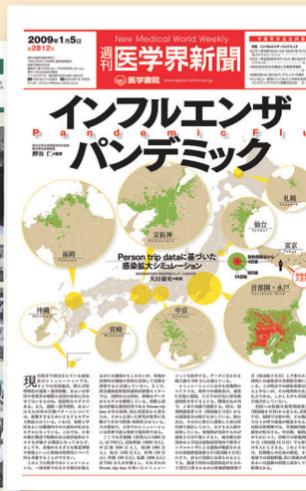
1955年創刊

New Medical World Weekly 週刊 医学界新聞

2012年

おかげさまで

3000号



モバイルアプリも10万件以上のダウンロードが

このアプリでは、医師向けの「通常号」(月2回更新)、研修医・医学部生向けの「レジデント号」(月1回更新)、看護師向けの「看護号」(月1回更新)の最新号を閲覧・保存できます。

ダウンロード方法

iPad版

App Store よりダウンロードできます。

iPhone版

医学書院 アプリ で検索

Android版

Google play よりダウンロードできます。

本紙連載から書籍化も (最新の4冊紹介)

実践ストレスマネジメント
「辞めたい」ナースと「疲れた」師長のために



久保田聡美
A5 頁176
2010年
定価2,310円
(本体2,200円+税5%)
[ISBN978-4-260-01190-7]

栄養塾
症例で学ぶクリニカルパール



編集 大村健二
A5 頁280
2010年
定価2,940円
(本体2,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-01014-6]

続 アメリカ医療の光と影
パスコントロール・
終末期医療の倫理と患者の権利



李 啓亮
四六判 頁280
2009年
定価2,310円
(本体2,200円+税5%)
[ISBN978-4-260-00768-9]

「人は死ぬ」それでも医師にできること
へき地医療,EBM,医学教育を
通して考える



名郷直樹
A5 頁260
2008年
定価2,310円
(本体2,200円+税5%)
[ISBN978-4-260-00577-7]

『週刊医学界新聞』3000号記念 ご愛読感謝プレゼント

1955年に創刊した弊紙は、本年10月29日号をもって3000号を迎えることとなりました。長年ご愛読いただいている皆様への感謝の意を込めて、プレゼントキャンペーンを実施いたします。是非この機会に奮ってご参加いただけますようお願いいたします。

- プレゼント内容**
- 『今日の診療プレミアム Vol.22 DVD-ROM for Windows』(10名様)
 - 『電子辞書 SR-A10004』(5名様)
 - 『看護医学電子辞書7 ツインカラー液晶・スクロールパッド搭載』(10名様)
 - 『医学書院 医学大辞典(第2版)』(30名様)
 - 『看護大事典(第2版)』(30名様)
 - 『日野原重明ダイアログ』(30名様)
 - 『特製マグネットクリップ』(上記プレゼント応募ではずれた方。先着順。在庫なくなり次第終了)

応募資格 医療従事者・医療系学生ならば、どなたでもご応募いただけます。

応募方法 (以下の方法があります)

- パソコンの場合は、医学書院WEBサイト内特設ページの応募フォームからご応募ください。
- ハガキの場合は、ご希望のプレゼント1点、本紙についてのご意見・ご要望、印象に残っている記事の感想などと、職業、年代、プレゼントの送付先の郵便番号、住所、氏名をお書きの上、下記の応募宛先までお送りください。
*応募は、お一人様1回限りとさせていただきます。

応募期間 2012年10月29日(月)～2012年11月30日(金) (応募フォームは24時まで、ハガキは当日消印有効)

当選者発表 ご当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。2012年12月から順次発送の予定です。

注意事項 ご応募いただいた個人情報につきましては、弊社のプライバシーポリシーに沿って適切に取り扱います。応募フォームからのご応募の際にご同意いただいた方には、後日別途読者アンケートやモニターへのご協力をお願いする場合がございます。DVD製品、電子辞書をご希望の方は、ご応募の前に各製品の動作環境、製品仕様等をお確かめください。

応募先 パソコンの場合は、医学書院WEBサイト内特設ページの応募フォームから
ハガキの宛先 〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23 株式会社医学書院 『週刊医学界新聞』3000号記念プレゼント係



医学書院

〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23 [販売部] TEL: 03-3817-5657 FAX: 03-3815-7804
E-mail: sd@igaku-shoin.co.jp http://www.igaku-shoin.co.jp 振替: 00170-9-96693